

中川区・善福寺坊守 廣田万里子

コロナ自粛で、家族が家にいることが多くなった。いつもなら月参りの法務を終えると私服に着替えて家を飛び出していく息子(二〇代後半)は、自室に籠ってスカイプとやらで友達と話しながらネットゲームに興じている。大学生の娘は膝に猫を座らせてパソコンで作業をしている。勉強かと覗くと、絵を描いていた。色鮮やかな画面をちらつと見て、こんな趣味があったのかと驚く。描いた絵は友達と見せ合うのだとか。SNSに投稿すると瞬時にコメントが返ってくるらしく、ニコニコしながら画面を眺めている。そんな彼らも、友達に会えないことを残念に思っているようだ。娘は春休みに手に入れた可愛いポーチを友達に見せたかったのにと寂しがつていた。息子も、パソコンのゲームやオンライン飲み会だけじゃつまらんと愚痴っている。いくら通信手段が発達しても、直接会って相手の顔を見て話すことには代えがたいものがあるのだろうか。

親鸞聖人は、二十九歳のときに出遇った師の法然上人と三十五歳の時に別れたきり、二度と会うことはなかった。だが親鸞聖人はその後の生涯をかけて師の教えを問い続けた。聖人のお手紙をまとめた『末燈鈔』には、次のように語っている八十五歳の時のお手紙が収録されている。

へ法然上人は「浄土の教えに出遇った人は愚者になつて往生する」と仰つていた。物も知らぬ人々が素直に念仏するのを見て、必ず往生すると微笑まれておられたが、書物を読んで偉そうに議論している人たちを見て、顔をしかめておられた。それを今でも思い出されるんだよ。＊1

五十年前に拝見した師の姿を昨日のことのように語る親鸞聖人の言葉には、胸に迫るものがある。

「直接お会いしていろいろ尋ねたいことがあつただろうね。」ある日の昼食の時、息子とそんな話をした。すると、最近本格的に声明作法の稽古をしている息子が、「あれ、蓮如上人は『夏御文』(げのおふみ)で、ぼんやり聴聞してんじゃねえ、聖教をちゃんと読めと仰つてるで。親鸞聖人のお手紙と逆じゃないの」＊2と、疑問を呈した。

確かにそうだ。これがきっかけでお念仏の教えについて息子と話すことができた。直接会うことのなかった親鸞聖人の教えに聖教をとおして出遇った蓮如上人。聖教拝読の稽古を通して教えに出遇った息子の息子と語ることで親鸞聖人の教えに立ち戻った私自身。引きこもりがちな日々の中で、人と教えとの出あいについて思いを馳せたひとときだった。

＊1『末燈鈔』第六通(『真宗聖典』六〇三頁)

【原文】故法然聖人は、「浄土宗のひとは愚者になりて往生す」と候いしことを、たしかにうけたまわり候いしうえに、ものもおぼえぬあさましき人々のまいりたるを御覧じては、往生必定すべしとてえませたまいしをみまいらせ候いき。ふみぎたして、さかさかしきひとのまいりたるをば、往生はいかがあらんずらんと、たしかにうけたまわりき。いまにいたるまでおもいあわせられ候うなり。

＊2『夏御文』(『真宗聖典』八四六～八五〇頁)

名古屋別院では、毎年七月五日～十二日まで永代経後に御文法談として『夏御文』(げのおふみ)が拝読されます。